

14 . また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。

『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。

15 . 「わたしは、あなたの行ないを知っている。

あなたは、冷たくもなく、熱くもない。

わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。

16 . このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

17 . あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、  
実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

18 . わたしはあなたに忠告する。

豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。

また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。

また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。

19 . わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。

だから、熱心になって、悔い改めなさい。

20 . 見よ。

わたしは、戸の外に立ってたたく。

だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、

わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

21 . 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。

それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

22 . 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』」

14 . また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。

『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。

Καὶ τῷ ἀγγέλῳ τῆς ἐν Λαοδικείᾳ ἐκκλησίας γράψον .

Τάδε λέγει ὁ Ἀμήν, ὁ μάρτυς ὁ πιστὸς καὶ ἀληθινός, ἡ ἀρχὴ τῆς κτίσεως τοῦ θεοῦ .

15 . 「わたしは、あなたの行ないを知っている。

あなたは、冷たくもなく、熱くもない。

わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。

Οἶδά σου τὰ ἔργα

ὅτι οὔτε ψυχρὸς εἶ οὔτε ζεστός.

*cold, chilly, cool* *boiled, boiling, hot,*

*indifferent, heartless* *fervent, zealous*

ὄφελον ψυχρὸς ἢς ἢ ζεστός.

used as a verbal particle to express an interj.

concerning an unattainable wish *would that! O that!* (1C 4.8).

「～だったらよいのに！」

16 . このように、あなたはなまめくるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。

οὕτως ὅτι χλιαρὸς εἶ καὶ οὔτε ζεστός οὔτε ψυχρός,  
lukewarm, tepid; pr.  
metaph. of a half-hearted condition of love and loyalty

μέλλω σε ἐμέσαι ἐκ τοῦ στόματός μου.  
pr. inf.  
intend to spit out, vomit

17 . あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、  
実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

ὅτι λέγεις ὅτι Πλούσιός εἰμι καὶ πεπλούτηκα καὶ οὐδὲν χρείαν ἔχω,  
pr. 物質的にも、靈的にも（美德、永遠の所有に於いて） pf.  
rich, wealthy, well-to-do be rich  
abounding in become rich  
be rich in someth.  
give generously (RO 10.12).

καὶ οὐκ οἶδας ὅτι σὺ εἶ ὁ ταλαίπωρος καὶ ἐλεεινὸς καὶ πτωχὸς καὶ τυφλὸς καὶ γυμνός,  
pf. miserable, pitiable poor blind, naked,  
wretched, destitute without sight unclothed  
distressed worthless, unable to understand  
powerless

18 . わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。  
また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。  
また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。

συμβουλεύω σοι ἀγοράσαι παρ' ἐμοῦ χρυσίον πεπυρωμένον ἐκ πυρὸς ἵνα πλουτήσης,  
καὶ ἱμάτια λευκὰ ἵνα περιβάλη καὶ μὴ φανερωθῇ ἡ αἰσχύνη τῆς γυμνότητός σου,  
καὶ κολλ[ο]ύριον ἐγγρῖσαι τοὺς ὀφθαλμούς σου ἵνα βλέπῃς.

19 . わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

ἐγὼ ὅσους ἐὰν φιλῶ ἐλέγγω καὶ παιδεύω .  
pr. pr. pr.  
bring to light, expose instruct, train, educate 子供を  
convince, convict 納得させる、有罪宣告する correct  
reprove, correct 指摘する、正す give guidance to 大人を  
rebuke, discipline, punish discipline  
punish, scourge, whip 鞭打ち  
訓戒  
エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ

ζήλευε οὖν καὶ μετανόησον.

Impr. pr.

ζηλεύω

be zealous or earnest,

greatly desire

Impr. aor.

μετανοέω

perceive afterwards,

repent, change one's mind, be converted

regret, feel sorry 良心の呵責

20 . 見よ。

わたしは、戸の外に立ってたたく。

だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、

わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

ἰδοὺ

ἔστηκα ἐπὶ τὴν θύραν καὶ κρούω.

ἵστημι pf.

κρούω pr. as seeking entrance *knock* (at a door or gate) (AC 12.13);

as seeking spiritual access *ask to be accepted* (RV 3.20).

ἐάν τις ἀκούσῃ τῆς φωνῆς μου

aor.

καὶ ἀνοίξῃ τὴν θύραν,

aor. ἀνοίγω

(1) trans. *open* (AC 12.14); *give entrance or access to* (MT 25.11); idiomatically

ἀνοίγειν τοὺς ὀφθαλμούς lit. *open the eyes*, i.e. *cause to see* (MT 9.30);

fig. *open the eyes of the mind*, i.e. *cause to understand* (AC 26.18);

ἀνοίγειν τὸ στόμα lit. *open the mouth*, i.e. *begin to speak* (MT 5.2);

ἀνοίγειν θύραν lit. *open a door*, i.e. *make possible* (CO 4.3);

αἱ ἀκοαὶ ἀνοίγουσιν lit. *the ears open*, i.e. *become able to hear* (MK 7.35);

(2) intrans. (2pf.) idiomatically

τὸ στόμα ἀνοίγειν πρὸς lit. *open the mouth toward*, i.e. *speak the whole truth* (2C 6.11).

箱 口 耳 心 天 天国の門(入口) 墓 神殿 家の戸 羊の門 牢の戸 巻物 封印 底知れぬ穴

[καὶ] εἰσελεύσομαι πρὸς αὐτὸν

fu. come, go

καὶ δειπνήσω μετ' αὐτοῦ καὶ αὐτὸς μετ' ἐμοῦ .

δειπνέω fut. eat, dine, take the main meal. chief meal, Lord's Supper

晚餐、正餐、宴会 ごちそう

21 . 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。

それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。

ὁ νικῶν δώσω αὐτῷ καθίσαι μετ' ἐμοῦ ἐν τῷ θρόνῳ μου,

ὡς ἐγὼ ἐνίκησα καὶ ἐκάθισα μετὰ τοῦ πατρός μου ἐν τῷ θρόνῳ αὐτοῦ.

22 . 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』」

ὁ ἔχων οὖς ἀκουσάτω τί τὸ πνεῦμα λέγει ταῖς ἐκκλησίαις.

## 説教

今年の年間聖句は

黙示録 3:15

**「あなたは、冷たくもなく、熱くもない。**

**わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。」**で、

先週は前半部をお話ししましたので、今週は後半部を特にお話ししたいと思います。

ヨハネの黙示録は使徒ヨハネが AD.90-95 年頃に書いたもので、

ローマのドミティアヌス帝(81~96)の迫害でパトモス島に島流しになった際、

ある主の日に復活の主イエスキリストが現れてヨハネにお見せになった世の終わりに起こる幻を書き記したものです。

中でも 3 章 14 節-22 節は、

復活の主イエスキリストが七つの教会に書き送った手紙のうちラオデキヤの教会に書き送った手紙です。

まず、前回のおさらいをします。

前半部のメインは

**「わたしは、あなたの行ないを知っている。**

**あなたは、冷たくもなく、熱くもない。**

**わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。 (15)**

**このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。」(16)**でした。

「なまぬるい」とは、

自分が貧しい何も無い者であるにもかかわらず、

あたかも何一つ不足がないかのように思い込んで、自分ひとりで、神さま抜きで、自己満足してしまっている状態です。

**「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、**

**実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」(17)**

それで、どうやったら自分の貧しい本当の姿が見えてくるのか、

「目に塗る目薬を買え」と言います。

そして、自分の貧しさをどう補えばいいのか、

「火で精錬された金を買え」と言います。

さらに、自分の惨めな裸をどう覆い隠せばいいのか、

イエスキリストという、「白い(義の)衣を買え」と言います。

そして、イエスさまは、

目薬を買って、金を買って、白い衣を買うには、

「熱心になって、悔い改める」ようお命じになります。

**「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。**

**だから、熱心になって、悔い改めなさい。 」(19)**

イエスさまは、  
あるいは私たちの日頃の生活に於いて、  
私たちを「しかったり、懲らしめたり」しておられるのです。  
神さまに背いて罪を犯し勝手に生きている私たちを、  
日々、「叱り（『光を照らす、暴露する、指摘する、正す、有罪宣告する、非難する、審判する』の意味）」、  
「懲らしめ（『教育する、訓練する、鞭打つ、教え込む』の意味）」ておられます。

そうやって、  
こういう所が悪いよと目に見せてくださいます。  
救い主キリストが必要であることを教えます。  
罪の赦しが必要であることを教えます。  
自分ひとりでは滅びる以外にないことを教えます。  
神さまの憐れみがなければ、私たちは滅びるしかありません。  
何もありません。  
一文無しです。  
天国への入場券も買うことができません。  
しかも、罪に汚れています。  
この罪のからだで一体どうやって神さまの前に立つことができるでしょうか。

だから、目薬が必要です。  
金が必要です。  
白い衣が必要です。

そして、これらをキリストから買うためには、日々「熱心になって、悔い改め」なければなりません。  
私たちを、日々、「叱り、懲らしめ」てくださる神さまの前に、「熱心になって、悔い改め」なければなりません。  
日々、私たちの罪を、光で照らし、暴露し、指摘し、正し、審判し、  
さらには、もう二度と犯さないよう、私たちが正しく歩むよう  
教育し、訓練し、鞭打ち、教え込んでくださる神さまの前に、「熱心になって、悔い改め」なければなりません。

そして、20節です。

20 . 見よ。  
わたしは、戸の外に立ってたたく。  
だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、  
わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

イエスさまは、私たちを「叱ったり、懲らしめたり」しておられることを、「戸の外に立ってたたく」と表現なさいませ

す。  
しかも、「だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら」とも言われます。

つまり、イエスさまは、私たちの人生の「戸の外に立って、叩いて」おられるのですが、  
その際、「おーい、悔い改めなさい、悔い改めなさい。」と

呼びかけながら、「戸の外に立って、叩いて」おられるというのです。

そして、イエスさまは、

「だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、

わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」と言われます。

ここでの風景は「和解のいけにえ」の際の食事の風景です。

「和解のいけにえ」とは別名「平和のいけにえ」です。

それは、神さまに最上の部分をささげ（神さまがそれを食べるという意味）、

残りの肉を人々が食べて、神と人とが和やかに食事をするのでした。

そうして、「和解のいけにえ」をささげてそれを食べながら、

自分が本当に神さまに罪赦され、受け入れられ、

神さまとの和解、平和に入れられ、その祝福に入れられていることを、

単に頭だけの観念によるだけでなく、その目で見、鼻でかぎ、手で触れ、舌で味わって体験するのです。

すなわち、神さまが自分の罪を贖ってくださったことを味わいます。

神さまが自分の罪を寛大に赦してくださったことを味わいます。

神さまが自分を受け入れてくださったことを味わいます。

自分を喜んでくださっていることを味わいます。

家族としてくださったことを味わいます。

神さまが自分を祝福してくださっていることを味わうのです。

最高においしい料理を食べながら味わいます。

難しい理屈抜きで、単純においしいと思う人間の本能に訴えて味わいます。

最高においしい料理を味わうことで、神さまの恵みを味わいます。

家族や隣人と共に和やかに鍋を囲んで楽しく宴会することで、

神さまに愛されている喜びを、心から体験して実感するのでした。

「和解のいけにえ」の「和解」と訳される言葉「שְׁלָמִים」シエラミーム」は  
「完全な、傷のない、安全な、健全な、調和ある、平和な状態」を意味します。

すなわち、かつては神さまに罪を犯して

神さまの怒りとさばきを受けねばならない者であったにもかかわらず、

今はいけにえが自分の身代わりになって神のさばきを残さず受けて

全焼となってくれたことにより、神のさばきを免れて神さまと「平和」な調和ある状態にあることを意味します。

そして、この「平和」な状態を意味する最も適切な表現こそ、まさしく食卓を囲む風景と言えます。

私たちは、余程親しい間柄でなければ他人と食事することはありません。

恋人同士とか同じ家族であるとか本当に親しい間柄でなければ共に食事することはないでしょう。

ましてや自分の家に招き入れて食事を振る舞うような間柄は、家族かあるいは家族同然の付き合いとすることができます。

全然知らない赤の他人や憎い敵を自宅に招き入れることはまずありえません。

このように、**共に食事をする**ということは、

家族同然に親しい間柄であり、お互いの間が仲の良い平和な状態にあることを意味します。

その際、重要な事実は、祝宴の主人が神さまであるということです。

もてなしを受ける客は、私たちです。

神さまは、罪贖われた私たちを天の御国の祝宴に招き、歓迎し、

もてなして、私たちを慰め、励まし、喜ばせて、私たちを強めてくれます。

レビ記三章の記述によると、

奉献者は自分の手を家畜の頭の上に置いて自分の手で屠ります。

この際、殺された家畜はすでに神さまにささげられており、どの部分も残らず神さまのものとなります。

そうして、神さまは、ささげ物を受け取った上で、そのささげ物をどうすべきか命じられます。

まずは、一部を火で焼いてご自分の食物となさいます。

次に、さらに一部を祭司に分け与えます。

そうして、最後の残りの部分で、神さまは礼拝者をもてなすのでした。

この意味に於いて、「和解のいけにえ」は神さまを代表するものです。

「全焼のいけにえ」の場合は、おもに罪を贖っていただく私たち自身を代表するものでした。

いけにえの上に手を置いて、自分の身代わりとして

いけにえを神さまの前に差し出してこれを屠ることで、自分の罪が贖われるという奉献者自身を代表するものでした。

しかし、「和解のいけにえ」にはそれ以上の意味があります。

罪贖われた者がその先どうなるのかというさらに一歩進んだ意味があります。

すなわち、

神さまは、

罪贖われた私たちを

ご自分の家の祝宴に招き、歓迎してもてなし、

私たちを慰め、励まし、喜ばせて、私たちを強めてくださるのです。

その意味で、「和解のいけにえ」は「いのちの糧」と言うべきものです。

「全焼のいけにえ」の場合、ささげる者は「罪の贖い」という神の恵みを受けます。

そして、「和解のいけにえ」では、それをささげた者に「罪を贖われた喜びと平安、確信」が与えられます。

信仰と肉体が養われるのです。

とりわけ、「和解のいけにえ」は、神さまが私たちの信仰を励まし強めてくれるものです。

神さまは、私たちに振る舞ってくださる食事（「和解のいけにえ」）によって、私たちを養い、生かしてくださるのです。

人は、

神さまが振る舞ってくださるこの「いのちの糧」と言うべき「和解のいけにえ」を食べながら、

自分が神さまに罪赦され、受け入れられ、神さまとの和解、平和に入れられ、

その祝福に入れられていることを、難しい理屈抜きで、単純においしいと思う人間の本能に訴えて味わうのでした。

イエスさまは、

**「わたしは、彼のところには行って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」**と言われます。

食事をして、どうしようとなさるのでしょうか。

イエスさまが来て、私たちに食事を振る舞ってくださることにどんな意味があるのでしょうか。

イエスさまは一体何のために私たちに食事を振る舞ってくださるのでしょうか。

それは、私たちにいのちをもたらすためです。

永遠のいのちをもたらすためです。

私たちの罪を赦し、受け入れ、ご自身との交わりに迎え入れて、私たちに救いの恵みと喜びとを与えてくださるためです。

そうやって、私たちを慰め、励まし、喜ばせ、私たちを養って、力づけてくださいます。

**「わたしは、**

**彼のところには行って、**

**彼とともに食事をし、**

**彼もわたしとともに食事をする。」**

ここでイエスさまの言われる「食事」とは、簡単な軽食とかランチの意味ではありません。

それは一日の食事の中で最もメインとなる「正餐」のことで、イエスさまの「最後の晩餐」を表現する際にも使われます。

他には「宴会、ごちそう」とも訳せます。

つまり、人間が生きていく上で食事は欠くことのできないものですが、

その食事の中でも最も重要な私たちの栄養源、活力の源、元気の源こそが

ここでイエスさまが振る舞ってくださる「食事（ごちそう、ディナー）」ということになります。

つまり、イエスさまは、飛び切り美味しく栄養のある宴会の「晩餐」によって、私たちを力づけてくださると言うのです。

神さまは、私たちの罪を赦して、天国の交わりに入れてくださいます。

そして、その事実を、「和解のいけにえ」の宴会の御馳走を振る舞うことで味わわせてくださいます。

私たちを元気づけ、力づけてくださるのです。

罪赦された喜びを味わわせてくださいます。

神さまに受け入れられた喜びを味わわせてくださいます。

神さまに愛されている実感を味わわせてくださいます。

そうして、私たちの信仰を励まし、養い、力づけてくださるのです。

**「わたしは、**

**彼のところには行って、**

**彼とともに食事をし、**

**彼もわたしとともに食事をする。」**

思えば、これは世の終わりの時の神さまの約束でもありました。

良く知られている詩篇 23 編にはこうあります。

「私の敵の前で、  
あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。  
私の杯は、あふれています。  
まことに、私のいのちの日の限り、  
いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。  
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」 23:5-6

イザヤ書 25 章では、

世の終わりに、神さまがとこしえに死を滅ぼされる時、

「万軍の主は、  
この山の上で万民のために、  
あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、  
髓の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される」(6)とあります。

これを受けて、イエスさまも、世の終わりに於ける「盛大な宴会」について言及されています(ルカ 14:15-24)。

これを「婚姻の祝宴」にも喩えました。

このような話はすべて神さまがご自分の家で私たちを豊かに養ってくださることを言っているものです。

神さまが「和解のいけにえ」によってご自分の民を慰め、励まし、その信仰を力づけてくださるのです。

イエスさまは、世の終わりに起こるこの約束をあらためて確認して、こう言われたのです。

20. 見よ。

わたしは、戸の外に立ってたく。  
だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、  
わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

**そして、それは「わたしの声を聞いて戸をあける」時です。**

みことばを聞いて悔い改める時、イエスさまは御馳走で力づけてくださるのです。

それまで神の声を聞かずに、自分中心に生きていた者が、

みことばを聞いて、その声に聞き従い、

イエスさまを自分の人生の主人として迎え入れる時、

イエスさまは私たちにご馳走を振る舞って、私たちを力づけてくださいます。

このみことばは不信者に対して言われたことではありません。

そうではなく、信者に対して言われたことです。

「生ぬるい」ラオデキヤの信者に対して言われたことです。

どうして「生ぬるい」のかと言えば、それはイエスさま不在の歩みをしているからです。

イエスさま抜きで生活し、

イエスさま抜きで勉強し、

イエスさま抜きで奉仕し、

イエスさま抜きで仕事をし、

イエスさま抜きで家庭を形成し、

イエスさま抜きで人付き合いをします。

だから、自分ひとりで満足してしまって、「生ぬるく」なってしまうのです。

自分がどんなに「惨めで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者である」かがわかりません。

でも、神さまがわかると、自分がわかります。

自分の姿が見えてきます。

死ぬべき罪人に過ぎないことがよくわかるようになるのです。

自分ひとりなら「あの人やこの人よりましだ」と自分勝手に自己満足していても、でも人は必ずいつか神の前に立ちます。

そうしたら、満足どころではありません。

無一物を経験します。

私は、自分が献身して神学校に入る時、生まれて初めてそういう経験をしました。

召命に従い自分がここで22歳になる自分の人生を神さまに献げて、その責任は誰が取ってくれるのだろうと思いました。

その時、私は、生まれて初めて、自分には「何も無い」ことを知りました。

それまでいるんなものに取り囲まれて、

何とはなしに安心し自己満足して生きていましたが、その時無一物を経験したのです。

「自分を支えるものが何も無い、自分が惨めで、裸で、盲目である」ことを実感したのです。

これが神さまの前に立つということです。

神さまの前には、私たちは何も無いのです。

無一物です。

惨めです。

裸です。

盲目です。

それで、私は神学校に行って、目薬と、金と、白い衣を買おうとしました。

イエスさまを自分の「主人」として、自分の人生に迎え入れました。

自分のしもべでなく、客でなく、自分の主人として、主に従うことを決意したのです。

それまでもイエスさまを信じていましたが、

その時初めて、私はイエスさまを自分の本当の「主人」として従うことにしたのです。

イエスさまのみことば通りに表現すると、「みことばを聞いて、戸を開けた」のです。

「熱心になって、悔い改めた」のです。

そして、

「主の御声を聞いて戸を開け」て、  
イエスさまを自分の主人として迎え入れた時、私の「熱い」信仰の生涯が始まりました。

そして、お約束通り、イエスさまは私に豊かな食事を振る舞って、私の信仰を励まし、力づけ、養って来て下さいました。

ここに集う私たちも、  
イエスさまの御声を聞いて、  
イエスさまを自分の人生の主人として迎え入れ、  
イエスさまから罪の赦しと救い、祝福、生きる力をいただいて、イエスさまと共に生きる人生を生きたいと願います。

そして、さらに、  
確認しなければならないことがあります、  
イエスさまは、以上の事実を踏まえた上で、「わたしはいのちのパンだ」と言われました。  
「わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物」と言われました。  
「まことに、まことに、あなたがたに告げます。  
人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。  
わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。  
わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」と言われました。  
「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。  
生ける父がわたしを遣わし、  
わたしが父によって生きているように、  
わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。  
これは、天から下ってきたパンです。  
あなたがたの先祖が食べて死んだようなものではありません。  
このパンを食べる者は永遠に生きます。」

イエスキリストこそは、私たちにいのちを与える、生けるまことの「和解のいけにえ」です。  
それを食べる物は「生きる」のです。  
いのちを与えるまことの糧です。  
ご自分が私たち罪人の身代わりになって十字架で死なれ、  
その裂かれた肉を人々に振る舞って、  
いけにえの身代わりの死の効力を人々にもたらす、  
そうやって、人々にいのちを与えるまことの糧です。

それでイエスさまは最後の晩餐の席で「パンを取り、祝福して後、これを裂き、弟子たちに与えて」こう言われました。

**「取って食べなさい。  
これはわたしのからだです。」**

この生けるまことの「和解のいけにえ」は、私たちを慰め、励まし、  
罪贖われたこの身を今日も生かし、力を与えて、私たちの信仰を強めて、救われた喜びで満たしてくださるのです。

レビ記の「和解のいけにえ」は

罪贖われた者が神さまに罪赦されて神さまと共に食事をする至福の喜びを象徴しておりました。  
ちょうどそのようにイエスさまが私たちと共に食事をしてくださると言います。

そして、それは外に立って戸を叩いておられるイエスさまの「声を聞いて戸をあける」時です。

悔い改めて、

神さまに閉ざしていた心を開いて、

イエスさまの「声を聞いて戸をあけるなら」、

創造の根源なる神さまの真実も自分の現実もわからず生きてきた私たちの目が開かれます。

そして、なまぬるかった私たちは、「熱く」あるいは「冷徹に」イエスさまに仕える者となるのです。

あのモーセは、神の山シナイ山で「燃える柴」を見てから、80歳になるその心に火が燃やされました。

そして、その神の火はモーセが活着ている間ずっと燃え続け、モーセをして120歳に至るまで神の働きをさせました。

復活のイエスさまと出会ったエマオ途上の弟子たちは、

そのイエスさまの話を聞いている間、心がずっと燃えていたと証しました。

「道々お話しになっている間も、

聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

イエスさまが共におられるならば、私たちのうちに燃えるのです。

私が赤羽聖書教会に赴任した時の率直な感想は

(申し訳ありませんが...)「何だか、随分となまぬるい教会だな」というものでした。

私自身、赤羽聖書教会の兄弟姉妹のことがよくわからなかったこともあり、

あるいは韓国から帰国したばかりで霊に燃えていたこともあったかもしれませんが、

その当時、赤羽聖書教会の兄弟姉妹を見ながら、(おとなしく善良な人たちと思いつつ)

どれもこれも何だかみんな中途半端に見えて、「これが都会の教会なのか」と思ったものです。

田舎の「足が地に着いた」と言うより「足が根を張っている」ような信仰とも違う印象を受けました。

根無し草のように、水中をぷかぷか浮いたり浮遊しているようにも見えました。

信徒のみなさんは言うまでもなく、礼拝の司会者も、役員まで、とにかく教会の人みんなが中途半端に見えたのです。

「何じゃ、こりゃ?」と思うこともよくありました。

(主日厳守、十一献金、夕拝、水曜祈祷会、掃除、厳しいこと言ったらいなくなるし....)

イエスさまの救いが本当にわかっているのかなとまで思いました。

でも、その中から、

小岩井信先生や小林伊佐美神学生、

八木隆之神学生、金善州姉妹、さらには金美羅姉妹のように、

少なくとも自分の全生涯を主に捧げて生きようとする兄弟姉妹があらわれてきたことは大きな祝福です。

このような奇跡は何も彼らの努力によることではありません。

イエスさまが彼らを召されたからです。

イエスさまが彼らをお召しになり、

彼らの人生の戸を叩かれ、

そのイエスさまの声を聞いて彼らが戸を開けた時から彼らの人生が変わったのです。

この世の最高の富である金ではなく、  
イエスさまが「信仰の金」、「白い衣」、「目薬」をお与えになりました。  
そして、ご自身の御国の祝福にお招きになったのです。

「熱くも冷たくもない」「なまぬるい」中途半端な人生から、  
イエスさまのために生きたい、普通の仕え方でなく、  
自分の全生涯を神さまに捧げて神さまのために生きたいと思うようになりました。

居ても立ってもいられなくなるような、  
「熱く」主に仕える、あるいは「冷徹に」イエスさまに付き従う、新しい人生に生まれ変わったのだと思います。

それもこれも、イエスさまが私たちの人生に入って来た時です。  
私たちの人生に入って来て寝食を共にして下さった時です。  
イエスさまが私たちと共に生き、同時に私たちもイエスさまと共に生きるようになった時です。

「わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。」  
このより正確な翻訳は「ああ、あなたが冷たいか熱いかであつたらよいのに！」です。  
何か神さまの私たちへの熱い思いが伝わってくるようです。

イエスさまは私たちのためにいのちを捨てて私たちの罪を贖ってくださいました。  
このイエスさまの救いにあずかったということは断じて軽いことではありません。  
救われた者は、当然のこととして自分のいのちを神さまに捧げずにはいられなくなるはずで  
自分の全生涯を捧げることは、何も献身者だけの特権ではありません。  
牧師や神学生だけの特権ではありません。  
救われた者は誰でも献身するのです。  
これがプロテスタントです。  
カトリックは、一部の特権階級だけが聖職者として献身者で、残りの一般人は「俗なる」汚れた者に過ぎません。  
でも、プロテスタントは「万人祭司」です。  
キリストを信じるすべての救われた者は「聖職者」です。  
「献身者」なのです。

ですから、イエスキリストの十字架の血によって罪贖われた者なら、誰でも例外なく献身に召されています。  
自分の全生涯、全財産、全生活を神さまに捧げて主に従うよう召されているのです。  
イエスさまのために生きなければなりません。  
なまぬるくではなく、「熱く」です。  
「冷たく」です。  
中途半端でなく、  
徹底して、  
死に至るまでも忠実に主に従い抜かねばなりません。

そうでなければ、はっきり言ってその人の救いは疑わしいと思います。

本当に救われているのかと思います。

少なくとも、イエスさまの救いがわかっているのかと思います。

なぜなら、イエスさまは、永遠のいのちを与えてくださったからです。

イエスさまは私たちのためにご自分のいのちを捨ててくださいました。

「それは、御子を信じる者がひとりも滅びることなく、永遠のいのちを持つため」、これが福音です。

そして、この福音を信じる者が救われます。

永遠のいのちが与えられるのです。

神さまが私たちにくださったものは永遠のいのちです。

百円や千円をくださったものではありません。

安っぽい御利益をくださったのでもありません。

永遠のいのちですよ。

これ以上ない宝です。

死んでもよみがえる復活のいのちです。

地獄に行くことのない、神さまにさばかれることのない、永遠のいのちです。

天国です。

そして、本当に永遠のいのちをいただいた者は、

あるいは、本当に永遠のいのちをいただいたならば、

残りの自分の人生を神さまに捧げて、神さまのために生きていくのです。

否、当然そう生きていくはずです。

神さまに献身します。

神さまは「あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。」(16)と言われます。

36年目を迎える赤羽聖書教会に属する私たちも、今一度自らの信仰を静かに振り返りたいと思います。